

憤りを書す (陸游)

早歳 那ぞ 知らん 世事の 艱きを

中原 北望して 気 山の 如し

楼船 夜雪 瓜洲の 渡

鉄馬 秋風 大 散関

塞上の 長城 空しく 自ら 許すも

鏡中の 衰髪 已に 先ず 斑なり

出師の 一表 真に 世に 名あり

千載 誰か 堪えん 伯仲の 間

早歳那知世事艱 中原北望氣如山
樓船夜雪瓜洲渡 鐵馬秋風大散關
塞上長城空自許 鏡中衰鬢已先斑
出師一表眞名世 千載誰堪伯仲間

解説 若年の時、戦場での自分を追憶する。後半は、身の老衰を嘆じ、諸葛孔明のような人物のいないことを慨嘆して結ぶ。

語釈 ※早歳||若い頃。※那知||知らなかった。※世事銀||世の中のことが思うようにならないこと。※中原||黄河流域の地方。※楼船||軍船。※瓜洲渡||江蘇省の南四十里の地にある渡し場。※鉄馬||鉄の鎧をつけた騎兵。※大散関||関所。※長城||万里の長城のように敵を防ぐをもって自ら任ずること。*斑||頭髪がしらがまじりになったこと。※出師一表||諸葛孔明が出陣の際に劉備の子、劉禪に奉った上奏文。*名世||名高いこと。*千載||千年。*伯仲間||伯は兄、仲は弟。優劣のつけにくいことをいう。

通釈 若い時分は世の中の難しさなど全く気が衝かなかつた。北方の中原の空を望んで、山のように意気軒昂であった。曾てはやぐらを組んだ十余丈もある高さの軍船に乗って、雪の降る夜、瓜洲の渡し場を過ぎたこともあれば、秋風のもと、武装して馬に跨がり大散関に立ったこともあった。国のために辺境の長城となろうと自負したが、今は鏡にうつる白髪頭を空しく見るばかりである。諸葛孔明の書いた出師の表の一篇こそは、真に孔明の忠誠心を一世に轟かしたが、千年たった今日、誰が彼と肩を並べることができるか。